

---

# 年賀状

ゆいまる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

年賀状

### 【Nコード】

N2564J

### 【作者名】

ゆいまる

### 【あらすじ】

君宛に出した年賀状。少し早めに出したのは、一緒に年を越せない予感があったから。君に僕の思いは届くだろうか。

『君に年賀状を出すことが出来るのは  
今年で最後だから……』

明けましておめでとう

僕は

ずっと君の幸せを願っています』

こんな文面の君宛の年賀状を投函した朝、クリスマスの華やいだ  
空気がまだ、名残雪ように街を覆っていた。

かじかむ手の先にコツンと冷たく硬いポストの口があたって、僕  
は思わず息を止めてしまった。じっと見つめた。ポストの穴は暗く  
て底が見えなかった。怖くなって、そこから目をそらすように顔を  
上げた。

赤いポストの向こうには生まれたての朝日を浴びて輝く空が広が  
っていた。遠い東の空からこちらに向かい、まっすぐな白い雲が伸  
びているのが見えた。

僕は酷い頭痛と胃の辺りからこみ上げる不快感を、慣れた手つき  
で胸の真ん中で握りつぶしながら、こんな僕を見て困ったように心  
配げに眉を寄せる君の顔を想像して小さく笑った。

十二月に入って特に、こんな事が増えている。君が知ればさらに  
眉間のしわは深くなり、その目に宿る不安の色は濃くなるのだろう。  
君は予感していた。こうなってしまうことを。

そしてその予感は当たったんだ。

僕は君とは一緒に年を越せなかった。カウントダウンを一緒にす  
るという約束を果たせなかったのだ。

君は今日、僕からの年賀状を読んだね。

何枚もある君宛の年賀状の中から、僕のへたくそな字が綴られたその一枚だけを抜き取り、机の上に乗るで仲間はずれのように他と隔離し、じつと睨みつけたんだ。涙に滲んだ瞳で。

怒っているのかい？ それとも、悲しいのかい？

いや、君は多分そのどちらでもないだろう。だって、その目に溢れた涙の一滴が頬を伝い辿りついた唇には微笑があつたのだから。  
「馬鹿」

君はそう呟いただろう。もしくは、一緒に年を越せなかつた僕への恨み言を口にしたかもしれない。

君はいつも僕の体を心配してくれていた。僕も僕自身の事は良くわかつていた。

正直に告白するよ。

僕の年賀状を睨み、微笑み、涙する君に。

いつもぎりぎりまで、いや、まともに年賀状を出したことなんか  
ない僕が、この年に限って早めに年賀状を出したのは、やっぱり、  
どこかでわかつていたからなんだ。こうなってしまうことを。

言い訳なのか、それとも懺悔なのか僕にもわからない。でも、君  
に伝えたかつたあの年賀状に託した言葉に嘘だけはないよ。

君はきつと、怒りながら泣いている。

火にかけてケトルが君を呼んでいるのにも関わらず、笑いながら  
泣いている。

つけっぱなしのテレビから笑い声が溢れ、めでたさを押し付ける  
映像が垂れ流されているのにも気づかず、きつと一人で、泣いてい  
る。

ごめん。

本当に、ごめん。

君に一言直接言つべきだったのに……僕の意識は一年の終わりを  
告げる鐘が鳴るころにはすっかりなかつたんだ。

本当は、君と新しいこの年を迎えたかつたのに。

「明けまして、おめでとう！」

僕は君の部屋のドアを開けた。

案の定、ケトルは鳴っていて、テレビはつけっぱなしだ。僕は二日酔いの体をねじ込むようにあがると、すぐに火を止め君を振り返った。

「馬鹿！ 約束したのに！」

思いがけず近くにあった君の顔に、僕は頭痛を感じながら手を合わせる。

「ごめん。親父につかまってどうしても抜けられなかったんだ。もう、べろんべろんでさ、紅白も最後まで見られない始末で」

「だから、いつも言ってるじゃない。飲みすぎないでねって。年末からずっとこの調子なんだから、いつか体壊しちゃうよ。こんなじゃ、困るんだからね！」

「どうして？」

想像通りの君の顔を、僕はおどけて覗き込む。君は口をすぼめ、まだ酔いの覚めない僕の目をじっと見る。その手には、僕からの年賀状が握られていた。

「どうしてって、それは……」

言いよどむ君のへそが曲がってしまふ前に、と僕はわざと明るい声で弁解めいたものを口にする。

「親父もお袋も喜んで。っていうか、カウントダウンの約束を反故しちまった事をいったら、すぐに謝りに言っつて、家に連れて来いっつて追い出されたんだぜ」

昨日、珍しく上機嫌に酒を飲み交わした親父の顔を思い出す。

そして、俺は年賀状の上から君の手を握った。

「嫁さんになる人を正月から一人で待たせるなんて、新年から罰当たりな事するんじゃないやねえって」

「馬鹿」

君はやっぱり、僕を睨みながら涙目で口元を緩ませる。

「明けましておめでとう」

僕がもう一度そういうと、君が笑いながら同じ事を口にした。

その笑顔を見ながら、僕は想像する。僕らの名前が仲良く並ぶ来年の年賀状を。

「今年も去年以上によろしく願います」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2564j/>

---

年賀状

2010年10月20日19時58分発行